

安部公房の都市

『燃えつきた地図』を中心に

博士前期課程一年 片野 智子

今回の発表では、安部公房の〈失踪三部作〉、特に『燃えつきた地図』を中心にして、作品内に描かれた都市と監視、監視と失踪者の関係について焦点を当てて論じた。まず始めに、近代以前、都市を交通の媒介として結び付けられていた諸共同体は、「国民国家」という均質で連続的な一つの巨大な内部空間として解消されていく。〈外部としての内部〉である都市の領域が広がることで、都市に局所化されていた外部性・他者性が社会全域に浸透していく。こうした〈外部としての都市〉の本質を覆い隠すために、社会では昔から様々な方法がとられてきた。それがパノプティコンと相互監視という二つの監視術である。第一のパノプティコンとは、元は十八世紀の哲学者ベンサムの発明した監獄のモデルであり、フーコーはこれを近代社会の監視システムに応用し、「そこでは自分が同時に二役を演じる権力的関係を自分に組込んで、自分がみずからの服従強制の本源になる」と説いた。すなわち、『自己を見る自己』と『自己に見られる自己』に主体が二分化され、権力に自発的に服従するようになるということである。第二の相互監視とは、社会の秩序を保つために、その構成員同士が〈見る―見られる〉関係を築くというものである。不特定多数の他者の視線にさらされることで人

は不安になり、自らの行動を自らで制限するようになる。この二つの監視術によって、人々の行動は常に見張られ、管理されている。だが、パノプティコンと相互監視の外部で生きている、いわば都市の盲点とも言えるべき存在がいる。それが失踪者である。注目すべきは、『失踪三部作』が書かれた時代に失踪者は激増しているということだ。安部公房は、都市の領域の拡大に伴って生まれた「隣人愛」の神話を問題視し、その反対の動きとして「失踪」という行為に注目した。けれども『砂の女』と『他人の顔』では、他者の眼差しから逃れることはできても、『自己を見る自己』の眼差しからは逃れることができないことが描かれていた。この限界を超えることが、三部作の集大成である『燃えつきた地図』の目的であった。『燃えつきた地図』の作品構造は、表向きは探偵小説の形式を採用しながらも、その内部では探偵小説の抱える限界を暴き出していくという特徴をもつ。探偵Ⅱ追う側の「ぼく」が、失踪者Ⅱ追われる側の「彼」へと反転することで、「ぼく」の中の『自己を見る自己』と『自己に見られる自己』の連関に亀裂が走る。記憶を失くした「ぼく」の語りを通してそれを読者にも追体験させることで、自己が自己であるための軸Ⅱ『自己を見る自己』と『自己に見られる自己』の関係がいかに脆いものであるかを再確認させ、我々を取巻く都市の外部性を改めて浮き彫りにすることが安部公房の狙いではなかったか。都市の外部性・他者性を覆うためにパノプティコンと相互監視は存在するが、安部公房は他者を「隣人」として見るのではなく、「他人」のままに向き合うことが必要だと言っている。そしてそれこそが、ボジとしての失踪者に秘められた可能性なのだ。